

「ひとりひとりが輝く地域づくり・人づくり」

出雲市四絡コミュニティセンター

1 四絡地区の概要

- (1) 四絡地区は「矢野、小山、大塚、姫原、渡橋」の5地区で形成され、出雲市のほぼ中心地に位置し、人口は約12,000人、世帯数も5,000世帯を超え出雲市43地区で2番目に大きい地区である。
- (2) 近年は、都市化が進み、地区を縦断する国道9号（出雲バイパス）を挟んで大型商業施設、総合病院、介護施設等が林立している。銀行やコンビニ、飲食チェーン店の出店が相次ぎ、利便性が向上したことで人口がさらに増加傾向にある。
- (3) 外国人住民も増加傾向にあり、四絡地区に居住する外国人住民は平成29年3月末時点で401人、地区住民に占める割合は3.3%で、出雲市全体の外国人住民比率1.8%の2倍近くと、市内でも有数の外国人集住地域となっている。

互いに理解を深めてもらうための接点づくりや関係づくりを進めるコーディネーター役となる人材を育成したいと考えた。

- (2) 日本のように防災教育を受けていない外国人住民がいたこと、避難場所など安心・安全に暮らすための情報が伝わっていないこと、また、言葉が通じない中で病気になった時に大変困っていることを聴き、安心マップ作りや、講習会等を通じた防災教育、受診に役立つ情報提供を行うこととした。

3 具体的な取組内容

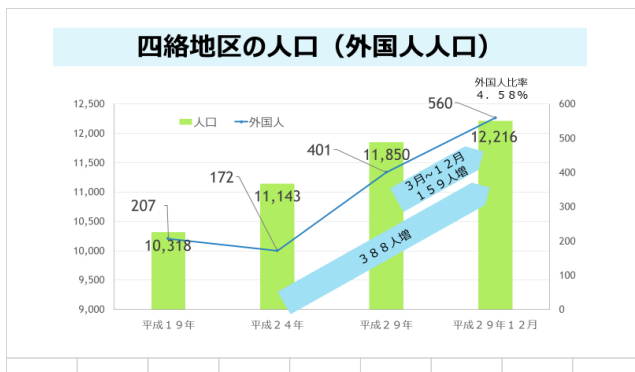
- (1) 交流～遊ぶ・食べる・知る～
 - ア よつがね夏祭りへの参加
外国人住民も一緒になってデコレーションを作り、交流を図った。



- イ よつがね文化祭への参加
外国人住民がブラジル料理の屋台を出店し、食を通じて地区住民との交流を図った。また、日本のお茶や生け花体験により、日本の文化を紹介した。



- ウ よつがね冬祭りへの参加



2 事業の趣旨

- (1) 言葉や生活習慣が違う外国人住民と積極的には関わろうとしない多くの地区住民に対し、外国人住民は「近所の人ともっと親しくしたい」「地域の行事に参加したい」といった気持ちがあることが分かった。そこで、まず、お

日本のお正月行事である餅つきをし、ぜんざいにして食べたり、ブラジルのスイーツのお店が出店されるなど、お互いの国の食文化を体験した。



また、日本のお正月遊びでは、外国人の親子と地域の親子が、コマ回しや凧あげ、羽根つきを一緒に体験し、参加者同士で交流した。



(2) 協働～安心・安全～ ア 防災教室

消防署へ出向き、救急車の多言語コールや消火器訓練、煙体験を行い、防災意識の向上を図った。

イ 安心マップ作り

外国人住民から困っていることを聴き、どのようなマップにするとよいかを話し合い、避難所と多言語対応の病院の表示を主体にマップ作成した。

4 評価と成果

(1) 出会い

文化祭等の地区のイベントに参加してもらい、体験活動を通してお互いの国に興味を持ち、お互いを理解したいという気持ちが芽生えた。親子の交流を通して、参加者の輪が広がり、特に食を知り合うことで、お互いの距離を縮めることができた。

(2) つながり

外国人住民と一緒に防災教室に参加し、災害時の対応や避難方法等についても

に理解を深めた。また、地域の救急体制等について知り、安心感を高めることができた。

安心マップ作りでは、外国人住民のニーズを聴き取り、話し合いの中でマップ案を作り上げることができた。外国人住民がこれから安心して暮らせる機能的なマップを作っていきたいと考えている。

また、話し合いの中で、生活上の苦勞や日本人住民ともっと関わりたいとの声を改めて聴き、コミセンが相談相手にもなれると感じている。

今回の取組により、外国人支援団体と連携を図り、つながりを持つことができたので、今後、コミセンでのイベントに外国人住民に積極的に参加してもらうことで、さらに活動の輪を広げていきたい。

5 今後の課題と見通し

- (1) 今回の取組みを広報やHPで周知することで情報発信を行い、地域住民の多文化共生に対する関心を高めていきたい。
- (2) 今回の取組をきっかけに、外国人住民と出会った人たちとの関わり、つながりを強める場を提供することで、地域のリーダーとなる人材を育成していきたい。
- (3) みんなで作ったマップを活用して、地域が一緒に話し合う場を設け、安心して暮らせる安全な地域づくりと住民同士の協働意識の向上を図りたい。
- (4) 交流の場の参加者との出会いを大切にして、地区住民同士も含めた人と人とのつながりの輪を広げていきたい。
- (5) ひとりひとりが輝き、また、四絡地区が輝くことで「もっとよつがねが好きになる」の思いで今後も地域づくりを進めていきたい。

(文責：センター長 福田修一)